

教育実習生は
隣の
お姉さん

青空白雲
表紙イラスト：めーすけ

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『教育実習生は隣のお姉さん』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



教育実習生は
隣の
お姉さん

青空白雲
表紙／めーすけ

登場人物紹介

Characters

なかにしはる き

仲西春樹

Y校に通う平凡な男子学生。かつて隣の家の優奈に憧れていた。

さくらぎゆう な

桜木優奈

Y校に教育実習生としてやってきた、二十二歳の大学生。美女で巨乳。

「今日から、教育実習生が来ることになった。W大の桜木優奈さくらぎゆうなさんだ。みんな、仲よくな」六月の最初の月曜日の朝。そろそろ暑くなってきた頃のこと。まだ梅雨入り宣言はされず、窓の外には深い青の空が広がっていた。雲は薄く伸びている。

担任教師の熊田くまだは、教室の入り口に立っていた女子大生に声をかけた。

「さあ、桜木先生、どうぞ」

教室内がざわついた。教壇に上がった教育実習生を見れば、それも無理からぬこと。

「初めまして。W大学教育学部英米文学専修の四年、桜木優奈です。このY校を卒業しました。二週間、よろしくお願いします」

黒のスーツジャケットに、お揃いのタイトなスカート。脚は、クリーム色のストッキングに包まれている。

ライトモカブラウンの髪はシニオンにまとめあげられている。もっちりした白い耳たぶが露わになっていて、実に愛らしい。前髪が斜めに額にかかっていた。顔は卵形で、眉は細く整えられ、目はアーモンド形、やや吊りあがりぎみともいえようか。きりつとした涼しげな目である。

鼻筋は細く通り、形のいい高い鼻の頭を作っている。控え目にルージユが引かれた唇は、ぼつてりして、肉厚だ。唇の左下に小さなほくろがある。

背は高いほうだろう。百六十センチ台半ばはあろうか。そして、何よりも、男子生徒ら

を惹きつけたのは、白いブラウスを持ち上げる胸。メロンがふたつ、実っているかのような大きさである。サイズなど、見ただけでは分からぬが、九十センチは確実にあるだろう。自己紹介をして、頭を下げたとき、ブラウスの胸元が重たげに揺れたのに、男子たちがため息をついた。女子たちは白い目でそんな男子たちを見やった。

生徒たちにとつても、教育実習生が来るとなれば、落ち着かなくなるのは、自然なことだった。ここ、二年六組でも、今年はどうなるかと、期待が高まっていた。

どうやら、女の先生らしい、ということ、男子たちはいつも以上にそわそわし、女子たちは、そんな男子たちを冷ややかな目で見ていた。どうせ、かわいくもない先生でしょ、と……。

しかし、教壇に上がった教育実習生を見て、女子の間からもため息が漏れた。男子はもちろん、喜びの声を上げている。

が、その中で、ひとり呆然としている生徒がいた。なかにしはるき仲西春樹。教室の一番後ろ、左のほうに座っていた。

(あれって……。優奈姉ちゃんじゃないかつ)

胸がドキッと鳴った。

(そうか……。優奈姉ちゃんも、Y校出身だもんな。実習に来るとしたら、ここに来るはず。これから、二週間、一緒なのか)

そう思うと、喜びと息苦しさに板挟みになってしまう。実は、優奈は、春樹が密かに憧れていた女性だったのだ。

「今度はお前たちが自己紹介するんだ。青島^{あおしま}。お前から」

ひょうきん者の青島が起立し、綺麗なお姉さんにアピールするように自己紹介した。

そして、春樹の番になる。立ち上がると、教壇に立つ優奈と目が合ってしまった。心臓が跳ねあがった。頬がかあつと微熱を持つ。自分でも、頬が赤くなっているのが分かる。

「仲西春樹です。よろしくお願いします」

ぼそつとした小さな声になってしまった。

「よろしくね、仲西くん」

優奈がにっこりほほ笑んだ。まるで、春の日差しのような、柔らかい笑みだ。少年の心に、温泉のような温かい波紋が広がった。

（これから二週間……。どんな顔をして、優奈姉ちゃんと付き合っていけばいいんだろう……）

机に視線を落とし、ため息をついた。

優奈の実家である桜木家は、仲西家のすぐ隣だった。親同士の交流もあり、いわば、優奈はいつつ年が離れてはいるが、幼馴染みだった。

優奈・健太姉弟とは、春樹はひとりつこなだけに、姉弟のように付き合ってきた。遊園地やプールに一緒に行ったり、夏祭りに遊びに行ったり……。

春樹が、優奈を異性と意識しはじめたのはいつごろだっただろうか。多分、中学に上がった頃だったと思う。優奈・健太姉弟と夏祭りに行ったとき、当時十八歳だったお姉さんの浴衣姿が眩しく見えたのを、よく憶えている。髪をアップにまとめあげ、ナチュラルなメイクを施し、白地にあじさいが描かれた、品のいい浴衣を身につけていた。

優奈がきらきら輝いて見えることに、戸惑いながらも、彼女と一緒にお祭りに行けることに、痺れるような喜びを覚えていた。

そして……。優奈が大学入学とともに、上京する、というとき、思い切って告白したのだ。お姉さんが好きです、付き合ってください、と書いた手紙を手渡して……。

結果、フラれてしまった。優奈には二年ほど交際していた彼氏がいたのだ。初めての失恋に、しばらくはよく眠ることもできなかった。

（今も、彼氏がいるのかな……。あれだけ綺麗なら、いても当然か）
少年は、ずっとぼーっとしていた。

教室内の男子生徒らも、どこか落ち着かない様子である。

優奈が担当しているのは、グラマー。黒板に丁寧な字で解説を加えていく。

「……ということで、この構文は強調構文になっています。この that の前が――」

黄色いチョークで that を囲む。

彼女が黒板に向かう。その後ろ姿をぼうーつと眺めてしまう。

ウエストは細くくびれている。男子学生ならば、片腕だけで抱きかかえることができよう。そこからふつくらと、黒のタイトスカートに包まれたお尻へと弧線が広がっていく。ウエストが細いためか、お尻はやけに大きく見える。パンパンに張りつめたお尻に、胸が熱くなった。

（ああ、だめだ。優奈姉ちゃんをそんな目で見ちゃ！）

と自分を叱りながらも、やはり、じつと視線を張りつかせてしまう。

「じゃあ、次の文を訳して。——仲西くん」

こちらを向いて、優奈が少年を見た。どきん！　として、春樹は立ち上がった。

「は、はいっ。ええと……」

スラスラ訳していく。元から、英語は得意で、模試の成績もいいのだ。

「はい、よくできました。この文もやはり、強調構文で、後ろから訳すと、分かりやすい日本語になります」

解説を終え、問題集を解くよう、指示する。

優奈が、席と席の間を移動する。そして、春樹のすぐそばを歩いてきた。シャーペンを握りながらも、つい視線を走らせてしまった。すると、教育実習生のお姉さんと目が合っ

てしまった。

優奈はにっこりほほ笑んだ。胸がとろけそうな優しいほほ笑みだった。アーモンド形の目が細くなり、目尻が下がり、わずかに形のいい鼻翼が膨らむ。ぽってりした唇から、白い歯が見えた。

（あ、ああ……。優奈姉ちゃん。僕、やっぱりお姉ちゃんのことがつ……。）

もちろん、あれから、何人かの女の子に恋をしたことはある。しかし、いつでも、胸のどこかに優奈がいて、一歩踏み出すことができなかつた。だから、未だかつてカノジョができたことがない童貞である。

ひとなみに性欲はあつたから、オナニーはよくしている。毎日当然で、日曜日などは二、三回はする。おかずは、優奈のことが多かつた。

慌てて、顔を伏せる。頬がかつかと熱かつた。

すると——。机にメモ用紙を折つたものが置かれた。顔を上げると、すでにお姉さんは前を歩いている。むちむちしたお尻、柔らかそうなラインを描くふくらはぎ、黒いローヒールが、目に飛び込んだ。

メモを見てみると——。

——放課後、学校を案内して。しばらく来ないうちに、ちょっと変わったみたいだから。いろいろお話しましょう。

と書いてあった。右肩上がりの小さな字に、胸が高鳴った。

「先生、この問題なんですけど……」

右斜め前の女子生徒が教師の卵に質問する。

優奈はやや前屈みになり、生徒の机を覗きこむ。

（ああ……。優奈姉ちゃん……。お尻がすごいよ。パンパンだ）

タイトスカートにお尻のラインがはつきり浮き上がる。その丸みラインに、十七歳の男子学生は、胸が詰まる思いがした。ふくらはぎの柔らかかそうな、ふつくらした様にも、どぎまぎする。

「あっ」と声を漏らし、生徒が消しゴムを落としてしまう。優奈が上半身を倒し、床に落ちた消しゴムに手を伸ばす。パンパンに張りつめたお尻が高く掲げられ、スカート裾がずりあがり、太腿の三分の一が露わになる。もっちりして、なんとも言えず、柔らかかそうだな。南からの陽光に、ストッキングが艶やかに輝く。

隣に座っていた島崎しまざきも、視線を優奈に貼りつかせているのが分かった。

「見るなよ」

春樹が小さな声で注意する。

「うるさいな。——ああ、桜木先生、いいなあ」

ため息をつき、視線を元に戻す。

「先生っ……。ああ、僕っ……」

「ん？ どうしたの？ 身体が固いね。リラックスして」

耳たぶをペロ、と舐められ、「ひっ？」と間抜けな声を上げてしまう。

さらに、美麗なる女子大生が、耳の穴にまで舌を差し込んできた。ねっとり唾液に濡れた舌は、軟体動物のよう。柔らかくて、溶けていきそうだ。

「ぴちゃ、ぴちゅ、ぴちゅん。——んふっ。春樹ったら、硬くなっちゃって。お姉さんとふたりきりになって、緊張しちゃっているの？ ん？ ——じゅ。ぴちゅん、じゅるん。れるろ。れるん」

甘い囁き声と舐め音が鼓膜を震わせる。背筋がゾクゾクした。かぐわしい香水の匂いと、背中を撫でるお姉さんの手指が心地いい。まさに、夢見心地で、まともな思考ができない。脳髓まで痺れていくようだ。

「んっ……」と、身体を離し、教育実習生はジャケットを脱いだ。一瞬、胸が迫りだして、少年の目を釘づけにした。まるでスイカがふたつ、中に収まっているかのようなのである。

「春樹のここ、カチカチだね？ どうして？」

「あ、ああつ。お姉ちゃん！」

ズボンを持ち上げるテントを指が這う。

「お姉ちゃんじゃないでしょ。先生と呼びなさい」

「せ、先生え……。だめですよ、こんなの。——あふっ」

「何がだめなの？ 春樹だったら、嬉しそうに鼻の下伸ばしているじゃない。はあはあ言っちゃってさ。ズボン越しに触られて、おちん○ん気持ちよくさせているんだね」

指の腹でテントを撫でまわす。布越しというのが、もどかしくてたまらない。小水穴がむずむずする。くすぐったくもあり、熱くもある。切なくて、甘くて、尿道まで緩やかな性感が波紋のように広がっていく。トランクスが湿っていくのが分かった。

また前屈みになっていいるせいか、胸の谷間が数センチ覗けてしまう。腕をきゅつ、と狭めているので、双子の膨らみがきつく寄りそい、なおのこと谷間が深く刻まれている。

「見てみたいな、春樹の。脱いで」

「で、でもっ……。誰か来たら、どうするの？ まだ五時だし……」

すぐそばには、美術室があり、美術部員が活動している。東側の音楽室からは、ピアノの音が聴こえていた。廊下を通る人影は見えないが、いつ誰が来るか分からない。いやらしいことをしているとバレたら、優奈が一番危険なのだ。

「静かにしていればいいの。さ、早く」

緊張に指を震わせながら、少年はズボンを脱ぐ。トランクスは鋭く尖って、勃起の輪郭を見せてしまっていた。頂には染みができている。

消えてしまいたいほど、恥ずかしい。

「わたしも脱ぐね。それなら、恥ずかしくないでしょ？」

いたずらっぽくほほ笑み、優奈がブラウスのボタンに指をかけた。

「ああ……」と呆ける十七歳の目の前に、綺麗なお姉さんのブラジャーが現れる。レモン色のブラにはフリルが付けられ、華やかな刺繍が施されていた。カップには、窮屈そうにふたつの乳房が収まっている。その大きさに、鼻の奥がツン、と痛くなる。

さらに、スカートも脱いでしまった。

「早くおちん○ん見せてよ」

頬を火照らせ、少年はトランクスを脱いだ。

「すごい……。これが春樹なの？ ちゃんと皮も剥けているのね」

瞳を輝かせて、そそり勃つ若幹を握ってくる。

（学校で、こんなことをするなんて。お姉ちゃんは何を考えているんだろう）
嬉しいような、怖いような複雑な感覚だった。

「ん、硬い。カチンコチンだね。若いのねえ」

目を弓なりに細め、ほほ笑む。

「くすぐりたい？ それとも、気持ちいいの？」

「気持ちいいよ。——あ、ああ、先生え」

「だんだんエッチな顔になってきたね。ふふ。赤くなっちゃって。そんな泣き出しそうな

顔見せられたら、お姉さんもエッチな気分になっちゃうよ」

緩やかに手を上下に動かしてくる。手のひらは、饅頭のようにしっとりしてもっちりしている。指はひんやりしていた。その柔らかい感触が、ペニスの芯にまで伝わってくる。

白く細長い五本指と薄桜色の爪が、赤銅色の肉竿に絡んでいる。汚いとしか思えないペニスを、憧れつづけたお姉さんが握っているのだ。申し訳なさと歡喜に、息が詰まりそう。は、は、は、と息を小刻みに弾ませ、じわじわこみあげてくる愉樂熱に身を任せる。

さらに、中指の腹で鈴口を撫でてくる。くすぐったさと、ピリッとした愉悅に、膝が震える。しなやかな指が先走りの滴にその白さをより鮮やかにさせた。つーつと、露が龟头丸みラインを伝い落ちる。

「んふっ。春樹の匂いがある。ああ、いい匂い」

優奈は、椅子から降り、床にひざまずいた。

鼻翼をぷくつと膨らませて、童貞少年のペニスの臭気を嗅ぐお姉さんは、眉先を垂らし、ますます目元の色を濃くさせていく。柔らかい鼻息がかかって、龟头がくすぐつたい。

そして、舌を出し、ぺろん、と舐めてきた。

「ひっ。あ、ああ」と、背筋を震わせた。熱い何かが弾けた。

「先生っ。汚いから、やめてよ。臭いでしよう？」

「れるれる。大丈夫。春樹の生ち○ぽ、なめなめしたいんだから。——ほらあ、気持ちい

いでしょ？ ん？ どう？ 先っぽがジンジンしちゃうでしょ？ れろっ」

麗しき顔を寄せ、赤みがかかった亀頭に唾液に濡れ光る舌を這わせてくる。

ぴちや、ぴちゅ、ちゆる。ぴちゅ。れろれろれろ。ぴちゅ。じゅちゅん。ちゅう。

いやらしい舐め音が耳を打つ。

「気持ち、いいよおお。す、すごいよおっ」

フェラチオくらい知ってはいるが、まさか、この綺麗なお姉さんが舐めてくれるとは思
いもしなかった。

張りつめた亀頭肉に、桃朱の濡れた舌が這いまわる様を、じつくり眺める。舌は左右ス
イングし、ペろんペろん上下にダンスする。我慢汁の滴がいくつも高く飛ぶ。唾液が溢れ
てきて、小さなあぶくを作り、我慢汁と混じっていく。

にちや、にちゅ、にじゅ。じゅじゅ、じゅちゅ。れろれろ。れろろん。じゅっ。

信じられない光景だ。くすぐったく、気持ちがいい。熱く、鋭敏に弾ける性感が、十七
歳の声を震わせる。

「あ、あ、あ、ああ……。お、お姉ちゃんっ。だ、だめ、だよおおお」

「ぴちゅ、れろ、れろろん。——こら、先生でしょ。優奈先生と呼びなさい。なめなめ、
やめちゃうよ？」

若竿を握り、緩やかに五本指を上下スライドさせつつ、少年の顔を見上げ、甘く睨む。

「は、はい、すいませんっ。優奈先生っ。続けて、下さいいい」

かあつと脳が痺れる感じがした。

小さく笑って、優奈が亀頭舐めを続ける。眉先が垂れ、頬に濃い桜紅が散る。

亀頭の裏側をねちつこく舐めてくる。ときに、唇をすぼめ、我慢の汁を啜りあげる。

れるれる、れろん。ぴちゅ、ぴちゅ、ぴちゅん。じゅ。じゅちゅうう。れるれる、でろろろ。

「んふっ。いやらしいお汁がどんどん出てくる。面白い。おち○ぽが張りきって、もつと硬くなってきているね？ れろれる。でろ。れろろん。じゅる、じゅる。じゅちゅう。ちゅばっ」

亀頭玉に吸いつかれて、「あひいい」と情けない声を上げる。

美しく整った顔のすぐ下には、ブラカップに包まれた豊か乳がふたつ仲よく並んでいる。カップから、乳裾野ははみ出していて、青白いとさえ言えた。よく見れば、青い血管が透けて見える。手コキの腕の動きに合わせて、むにん、と乳房がくつついたり、少しだけ離れたりする。胸溪谷に落ちた影も淡くなったり、濃くなったりと変化し、その形も微妙に変わっていく。

鈴口にはたつぷり我慢汁が滲む。唾と混じりあい、ますます練り音を高くさせる。左右上下にとせわしない舌のダンスに、混合汁が飛び、露わになった生白い乳房裾野に飛んでいく。滴はぬらーつと裾野を滑りおち、カップに包まれたおっぱいに流れていく。

「焦らないの。ほら、ここ……」

肉幹を握り、優しくエスコートしてくれる。ぬぶんっ……と亀頭玉が秘穴に嵌まる。あとはスムーズで、根元まで一気に肉洞に埋まった。

「くああああっ」と声を上げ、尻を震わせた。にゆるん……と潤った蜜肉が亀頭と竿肉を抱きしめてきた。ペニスがドロドロになっていく。猛烈な愉楽衝撃が下半身を覆いつくす。動いてもいないのに、気持ちよすぎた。

さらに、優奈の長い脚が少年の腰に巻きついてくる。

「あうっ。せ、先生え。まじですっ」

「何がまじいの？ ほら、動いてごらんさい。カチカチおち○ほで先生を気持ちよくして。男の子でしょ」

歯を鳴らし、腰を引く。ねっとりと蜜爇が絡んで、離すまいとする。ゾワゾワツと甘い戦慄が背筋を痺れさせる。ほんの数センチ、牡幹を前後させただけで、とろけていきそうな高熱の肉悦が襲ってくる。

見下ろせば、赤褐色の肉ピラが肉幹にくっついていて。あまりにいやらしい光景に、背筋がゾクゾクした。

「いいんだよ、出ちゃっても。若いんだから、何度でもできるでしょ？ ほら、ほらっ」
下から女腰を上下に揺すってきた。

「あひっ？　せ、先生ええ。だめ、だめ、れすううううう。出ちゃうっ」

どくん！　どびゆるるるうう。どぷっ。どぶんっ。どく、どく、どく、どくんっ。ぴゅ、ぴゅ、ぴゆる。びゅー……。

脳天にまで甘美な電撃が突き抜けた。十七歳は涎を垂らし、牡腰を震わせた。若精を味わうように、濡れぬれの蜜肉が収縮する。その動きに、くすぐったさと熱さを覚えた。

「もう一回頑張りなさい」

ペシ、と裸の尻を手で優しく叩き、優奈が笑った。

「は、はい、はいいいい」

少年はゆっくり腰を前後させた。精液の放出のせい、より一層肉洞内部はぬるぬるになつてゐる。そのぬかるむ膣肉を、亀頭で刺激していく。ひと擦りごとに、鋭い性感衝撃が若牡を突き抜けていく。

「ん、ん、んう……。もつと、もつと動いて、春樹い。先生のおま○この奥の奥まで、かわい亀さんで擦つてよ」

「が、頑張ります！　こうですか？」

「もつと！　そんなことじゃ、先生を気持ちよくできないでしょ。——ん、ん、んはああっ。あ、あ、あ、あ。——だんだん上手になつてきたよ。あ、あ、ああ……」

頬を染め、白い歯を零し、優奈が少年を励ます。

ぬちゅ、じゅ、じゅちゅ、にちゅ。にちゅ。にちゅ、にちゅ、にちゅん。じゅ、じゅ。

蜜汁練り音が耳を打つ。遠くでカラスの鳴き声が聴こえる。

「んん、春樹い」

あごを反らし、鼻翼をぴくぴくさせるお姉さんの表情に、高まってしまふ。劇悦が襲ってきた。骨盤にまで響くようだ。すでに、ペニス自体の感覚がないかのようで、ただただ、猛烈な快感があるのみだった。

テンポアップしてきた腰遣いに、ブラウスを盛り上げる胸房がゆさ、ゆさ……と揺れる。教育実習生は、鼻息を甘く漏らしている。眉が垂れてきて、泣いてしまいそうな表情だ。「先生！ また出ちゃうつ。ああ、また出しちゃいますうううううう」

「ん、ん、ああ、ああ、あ、ん、ん、んふつ。出ちゃうの？ また白くてエッチなジュースをぴゅぴゅつて出しちゃうの？ 先生の赤ちゃんができるところにかけちゃうの？ あ、あ、ああ、ん、んはあつ。春樹いいい」

どぴゅ どぴゅるるるるつ。びゅ、びゅ、びゅるるるる。ぴゅー、ぴゅー……。

お姉さんの身体に倒れこみ、荒い息づかいを繰り返す。胸が優しく身体を受け止めてくれた。香水の匂いに癒やされていく。

「しょうがないな、もう……。まだできるよね？ 若いおち○ぼだから、イケるよね？」
少年を起こし、彼に向けて、お尻を見せて四つん這いになる。片手でスカートをめくり

あげる。

「先生……。お尻がエッチです！」

「さあ、いらつしやい。先生のいやらしいお尻、好きなようにしてもいいのよ？ さ、早くガチガチのち○ぽを突つ込んでえ」

天に輝く太陽の光の下、薄桃肌色の生尻を左右にゆつくりスイングさせ、若牡を誘惑する。ウエストは細く、春樹でも片腕で抱えられそうだ。そこから花開くようにお尻へと弧線が優雅に広がる。

牡と牝の混合エキスにびしょ濡れの勃起を、秘口に埋める。また位置がずれたようだが、二回トライして、ちゃんと先つぽを埋め込むことができた。

「ああ……。先生のここ、気持ちよすぎるよつ。病みつきになつちゃうよお」

「何度でもさせてあげる。ね？ だから、頑張つて春樹もお姉さんをイカせてちょうだい」

「頑張りますつ。いくよ」

牡幹を前後に動かす。まだ動きはぎこちないものの、優奈も鼻息を弾ませてきた。

「ん、ん、んふつ……。あ、あ、あ、あん。ああ、春樹の立派なち○ぽがあ、ん、奥まで突きささっているう。ん、ん。あ、あ、あ、あ、あん。むふつ」

「気持ちいい？ 先生、感じてくれている？」

「ん、いいよ。先つぽの出つ張りが擦ってきて、たまらない。ん、ん、あ、あ、あ、あ、あ

ん、ん、んひっ。ひ、ひ、ひんっ。ま〇こがヒリヒリするよおお。——あ、あ、あ、あ、あ、あ、ん、ん、んああっ」

下腹部がお尻にぶつかると鈍い音がする。それに合わせて、姫汁捏ね音も。

にちや、にちゆ、にちゆん。じゆ、じゆ、じゆぼ。にちや、にじゆ、にじゆん。じゆ、じゆ。じゆぼ、じゆぼんっ。にちゆ。

見下ろせば、赤茶色の肉の花びらが開き、ひくひくしている。出し入れされる牡幹はさらに白濁の秘汁にまみれ、鈍くテカッていた。ふたりの性器がつながる部分には、白いあぶくがいくつもできては、弾け、また新しいあぶくができる。

「あ、あ、あん、ん……。いいよ、上手だよ、春樹い。先生も、ん、すごくいいの。気持ちいい。あ、あ、ああ、ん、ん、んはあつ。エッチなお汁が溢れちゃうよおお。あ、あ、ああん、んは、は、は、はあああつ……」

後ろを振り返り、喜悦を訴える二十二歳。眉先は切なげに垂れ、瞳は潤んでいる。頬には華麗に桜朱色が散る。髪の毛が一本、長く頬に貼りついていた。

豊かな女尻は前後に、左右にスイングしている。

「ん、ん、んはっ。あ、あ、ああ、ん、ん、んはあああつ……。春、樹い。い、いい、いいよおお。あ、あ、あ、あつ。お姉さん、すごく気持ちいいっ。春樹のお、先っぽで子宮ツンツンされてえ……。あん、気持ちいいっ」

「本当？ 先生、そんなに感じてくれているのっ？ 僕、とつても嬉しいよ！ もっと頑張るからねっ」

お尻を抱え、さらに牡腰の前後スライドを加速させていく。二回も発射したから、まだ余裕がある。

にちゃん、にちゅ、にちゅ、じゅちゅん。

いやらしい蜜鳴り音が鼓膜を震わせた。

ふたりの性毛はドレツシングがかかったように白くなり、いくつもの露を滴らせていく。鼻先にも、乳酪臭がした。酸味がかかったスメルもある。

下腹部を打ちつけるたびに、染みひとつない、マシユマロのようなお尻の肌にはざざ波が起きる。

「先生ええ。もうイキそうですか？ どうですか？」

「お調子にいい、乗らないのっ。童貞を卒業したばかりのきみに、そう簡単にいい、ん、んあ。んっ。イカせられるわけえ、ないで、しょおとおお。——ん、ん、んああああつ。ひっ、ひい。ひいひい」

「あくっ……。せ、先生え。そんなに、締めないでえええ」

きゅきゅつと締まるお姉さん膣に、肉茎が歓喜の雄たけびを上げる。尿道がチリチリと焦げる。息が詰まった。ぬかるむ肉洞にしごかれ、どんどん射精欲求が高まる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>